

名曲の世界への入り口

演奏学科音楽専修2年

平山あみ花

全く自慢になりはしないが、私はあまりクラシック音楽に明るくない。音大生として恥ずかしくないのでかと思えば、後ろ指を指したい気持ちになりながらも、幼小中高と普通科の教育を受けて育ち、特に音楽に熱心な家族がいる環境で育ったわけでもない私は、現在進行形でクラシック音楽の入門者というわけである。

そんな私相手でも、クラシックの世界へ手を引いて行ってくれる1冊があった。『クラシックの魔法』という本がそれである。著者の西村朗氏は東京音楽大学で教鞭をとっておられる作曲家であり、おそらくその名に覚えのある人は多いだろうと思われる。自らを讀者をクラシック音楽に導く「アリスの白ウサギ」と喩えるところから始まるこの本は、決して難解な言葉を用いず、それでいて音楽知識の浅い読者を惹きつけるような

魅力的な文章で綴られている。「天上界からの至高の光が音の形として伝えられている」だの、「悲しい楽想がキラキラ輝きながらこぼれ落ちてくる」だのと表現されては、興味を持たないわけにはいかないというものだ（ちなみにこの引用は、それぞれモーツァルト《クラーネット五重奏曲》、ベートーヴェン《ピアノ・ソナタ第十七番「テンペスト」》の紹介である）。冒頭に應えるかのように、ふとした余白に挿入されたアリスのイラストも目に楽しい。

基礎知識の乏しい者には、複雑怪奇な音楽理論を並べ立てられても音楽のスパラシサというものはいまいち把握できない。しかし誰だって初めは初心者であるわけで、そういった者がクラシック音楽を知りたい、聴きたい、学びたいとなった時、本当に必要とされるのはこういった指南書なのでは

ないかと思う次第である。単純な読み物としても楽しめる1冊であるし、今更私にそんな本は必要ないなんて勿体ない思考に走る前に、初心に戻るつもりでこういった本を開いてみるのも乙なものではないだろうか。



請求記号●J114-452
『クラシックの魔法
スピリチュアル名曲論』
(講談社 2008)

CD 夢の世界の音楽

大学院1年器楽専攻(フルート)

福田亜由美

デイズニーといえば、夢の世界ですよね。そんな「夢の世界をつくりあげているのは、可愛いキャラクターたちや楽しいストーリーなど色々な要素があると思います」が、中でも音楽は絶対に欠かせないと私は思います。デイズニー音楽って、聴いているだけで「夢の世界」にいるような気分になりますか？私だけでしょうか。

そんな「夢の世界」を求めて図書館で探していたのですが……意外とたくさんあるんですね。今回はその中の一つ、「The music behind the magic」をご紹介します。ていただこうと思います。

この資料、なんとCDが4枚も入っているんです。LD並みの大きさの箱が出てくるので少し驚きますが、CDの中身は、「リトル・マーメイド」「美女と野獣」「アラジン」の3作品。これらの作品はアカデミー賞、グラミー賞、ゴールデングローブ賞を多数受賞した、世界が認める素晴らしい作品だといふことはご存知の方も多はずです。ですから、映画を観るのはもちろんお勧めです。

しかし、このCDには映画とは違った魅力がたくさん詰まっています。アラン・メンケン、ハワード・アシュマン、そしてテイ

●ふくだ あゆみ デイズニーのCDは疲れた時に聴くと本当癒されます。一時期ずっと聴いてました(笑)パート・オブ・ユア・ワールドがお気に入り♪

●ひらやま あみか この本と私が出会えたのは、「これ面白いよ」と薦めてくれた友人がいたからである。私にとっての白ウサギは彼女だったのかも知れない。

「音楽の都」という地名を聞けば、

ウィーンという地名を聞けば、かべる人は多いのではないだろうか。クラシック音楽が盛んなこと



解読書も英語版と日本語版の2冊が付いていて、そこにはメンケンとアシュマン、アシュマンが亡くなってからはメンケンとライスが曲を作っている様子、それを見ていたスタッフの言葉や身内の言葉、1曲1曲に込められた想いなどが書かれていたり、写真や可愛

ム・ライスによって生み出された名曲の数々。映画で使われた曲はもちろん、作曲のためだけに使った「ワークテープ」（一般の人に聴かせるためのものではない）や、歌やアレンジを他のスタッフに聞いてもらうために使った「デモ・ヴァージョン」、映画やCDで使われなかった「未完成マスター」といったものまで入っていて、とってもレアです！

いキャラクターたちが載っていたり。この解説書を読みながら聴くと、また違った気分、違った世界が見えてくるような気がしてすごく楽しいです。もちろん何も考えずに聴いても楽しめると思います。『夢の世界』に浸りたい方、ドイツ音楽が好きなお勧め！時間に余裕ができた方なども是非聴いてみてはいかがでしょうか。



請求記号●XD33356~33359
『ミュージック・ビハインド・マジック』Walt Disney Records
PCCD-00123 ※デイスニー
ストア専売商品（現在、廃盤）

で知られ、ウィーン古典派を筆頭に様々な作曲家がこの地で音楽活動を行ってきた。クラシック音楽を勉強するものにとつて避けられない地の一つといえる。わたしは大学時代からシューベルトの研究を始め、彼がその生涯のほとんどを過ごしたウィーンに興味を持つてきた。そしてシュベルトという音楽家を通して見たウィーンに惹かれていったが、ウィーンという都市と音楽の関係についてはまったく無知であった。そこで出会ったのが『音楽都市ウィーン―その黄金期の光と影―』という本である。



請求記号●C44-588
A.M. ハンスン著 喜多尾道冬・稲垣孝博共訳『音楽都市ウィーン―その黄金期の光と影―』音楽之友社 ※現在は絶版

本書のタイトルにある黄金期とは1815年から1830年の15年間を指しており、その時代に社会と音楽がどのように絡み合っていたのか考察している。英語の原題『ビーターマイアー時代のウィーンの音楽生活』の「ビーターマイアー」とは、ドイツ・オーストリアの政治的に平穏なこの時代に、新しく勢力を増してきた中産階級の生活様式を指した用語である。この時代を象徴するメーテルニヒ体制によって自由主義は弾圧されたが、オペラを除いて音楽

にはそれほど強い影響を与えなかった。音楽は市民のほけ口であつたようだ。当時、ウィーンにいたベートーヴェン、シューベルト、シュトラウス父子、そして外国から来てはやされたロッシーニやヴェルトオーゾとして活躍したバガニーニらは中産階級の市民の需要を満たす音楽を生み出し、音楽の黄金期を形成していった。